



# CONTENTS

巻頭寄稿	1
特別公開講座紹介	2
特別研究紹介	3
文化芸術セミナー紹介	4
調査研究報告	5
学内活動報告	6
第24回国民文化祭関連	7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533  
 ●Tel: 053-457-6113 ●Fax: 053-457-6123 ●http://www.suac.jp/

## A r t s & C u l t u r e



デザイン学部メディア造形学科  
**長嶋 洋一**  
 Yoichi Nagashima

### メディアアートの発展とSUAC／日本の貢献

#### 1. SUACとメディアアート

本学(SUAC)の「文化・芸術研究センター長特別研究」テーマの一つとして、本学の特長である芸術文化マネジメント、デザイン学部のアートとサイエンス(技術と感性)の結び付いた領域のテーマ「メディアアート」に関する研究や活動が支援され続けてきた。開学直後からのデザイン学部長特別研究、さらに学長・デザイン研究科長特別研究としての支援を含めると、SUAC開学より10年間、ほぼ一貫してこのテーマを続けてきた結果として、2000年にはほとんど学内では知られていなかった「メディアアート」という用語や概念は、だいぶ定着してきた印象がある。

デザイン学部では、開学以来の「技術造形学科」から、その基本的コンセプトを継承しながら時代を先読みして2006年に「メディア造形学科」への名称変更を行ったが、国内の多くの大学で追随するように「メディア」を看板とする新学部・新学科が誕生した事実は、この流れが時代の要請であった事を証明している。

そしてSUAC開学10周年の本年秋季には、SUACで毎年開催してきたメディアアートフェスティバル(以下MAF)の併催イベントとして、しずおか国民文化祭の県企画の一つ、「文化庁メディア芸術祭浜松展」がSUACにて開催される。SUACが国内外の専門家や作家と連携して単独で開催してきたイベントと、政府が国を上げてコンテンツ立国のために振興するイベントとの合体は、まさに「メディアアート」時代の象徴である。

#### 2. 「メディアアート」の定義と本質

筆者は芸術文化学科専門科目「メディアアーツ論」を開学以来、担当しているが、この講義は毎年、その内容を劇的に変化させていく宿命を持っている。そもそも、「メディアアート」という用語自体が時代とともに変貌している「生き物」であり、定義を学術的に確定させるのは非常に困難である。

文化庁メディア芸術プラザ[1]の中の解説ページ[2]の最初の項目タイトルは「メディアアートって、何?」であり、ここには「…メディアテクノロジーを介して

はじめて表現や鑑賞が可能なアート。メディアの性質・本質を生かすことで得られた新たな表現や創造性。あるいは、メディアや情報社会の本質を示唆したり、未来への展望を開くような作品。…メディアテクノロジーの本質と不可分な作品」と紹介されている。これまで国内あるいは世界的に共通認識とされた定義として、よく整理された解説である。SUACで過去に開催してきたMAFにおいても、この文脈から「アニメ/CG/映像作品上映会」「インスタレーション作品展示」「コンピュータ音楽コンサート」「Web/FLASH/CGパネル作品展示」などを行ってきた。昨年にはシンポジウムとワークショップも企画開催している。

#### 3. 「メディア芸術」の定義と混乱

この一方で、通称「国営マンガ喫茶」と話題になった、同じ文化庁の提唱する「国立メディア芸術総合センター(仮称)」のページ[3]が定義する「メディア芸術」は、「映画・マンガ・アニメーション・CGアート・ゲームや電子機器等を利用した新しい分野の芸術の総称です」とある。世界的にこれまで、マンガやゲーム(電子機器)を定義に含んだ例は無く、非常に異質な印象である。ここには、20世紀の工業立国が失速した政府と産業界が、世界的に知名度の高い、日本のゲーム・アニメ・マンガ・オタク等を新しい産業基盤として利用したい、という経済的な要請がある。文化庁・経産省・外務省などの国家的戦略というバイアスのかかった「メディア芸術」がマスコミを賑わせていることで、逆に芸術文化的(学術的)には混乱している、という現状認識が必要であろう。

日本の政府や産業界が、21世紀の日本の経済的/文化的アイデンティティとして、このような独自の定義による「メディア芸術」を振興すること自体は、悪いことでもないの筆者も異論はない。この秋には、かなり定義の異なる両者がSUACに合体する、という偶然を、このような視点から楽しむのも面白いかもしれない。

#### 4. SUACのMAFとメディアアートの将来

別ページで紹介するように、「MAF2009+文化庁メディア芸術祭浜松展」においては、これまでSUACで開催された各種の展示企画の中でも最大・最多の、非常に充実した展示とイベント企画が集結した。SUAC独自企画のシンポジウムのテーマも挑戦的であり、2回目となるワークショップも注目されている。

メディアアートはその本質として、コンテンツの知的財産、共同制作コミュニティ(新しい著作権)の概念、新しい発表/配布/流通モデルの提案など、地域経済界とともに検討したい(国内どころか世界に直結する)テーマが取り巻いている。SUACがこれまで築き上げてきたMAFの歴史とともに、両学部・産官学共同の一つの中核として育て上げていきたい。興味ある方々の参加を期待している。

[1] <http://plaza.bunka.go.jp/>  
 [2] <http://plaza.bunka.go.jp/museum/archives/5minutes/200507/index.php>  
 [3] [http://www.bunka.go.jp/oshirase\\_other/2009/mediageijutsu\\_090514.html](http://www.bunka.go.jp/oshirase_other/2009/mediageijutsu_090514.html)

# ミヒャエル・ゾーヴァの世界と仕事

特別公開講座 2009.4.25~4.26



ミヒャエル・ゾーヴァはベルリン在住の画家である。日本では挿絵画家というイメージがあるが、本人はしばしば自分のことを「風刺画家」という。日本では耳慣れないが、ドイツの本屋に行くと「風刺本」のコーナーがあることも多く、「風刺」はひとつのジャンルとして確立されている。むしろ彼は大人向けアーティストといっていい。彼が挿絵を担当する作品も、どちらかというとYA(ヤングアダルト)や、大人の心に深く染み入るものがほとんどである。

ゾーヴァは、このような仕事以外にも、社会の様々な組織と組んで多くのポスター、イラストレーションなどの仕事にたずさわっていて、そのような仕事も高い評価を得ている。彼は、決して浮世離れたファンタジックなアーティストではなく、社会を深く見詰め、その冷静で鋭い視線を作品に織り込むリアリストなのである。

本学では以前ゾーヴァが来日した際講演会を開催し、そのときに多くの学生、一般市民に彼の作品制作の過程を知ってもらうことができた。しかし、今回は客員教授としての再訪ということもあって、もっと学生と直接ふれあいたい、というのが彼の希望だった。そこで、学生のためのワークショップと、さらにそれを一般市民の方に共有していただくためのワークショップの「ライブ」を開催するという計画がたつた。

プログラムを組む我々が最初に考えたのは、社会を鋭く見詰め、しかし人々が共感でき、ユーモアと想像性に溢れた作品へと昇華していく、ゾーヴァというアーティストの発想のすばらしさ、構想力の巧みさをいかにワークショップの中で受講生に伝えられるか、ということだった。

ゾーヴァ、学生、お互いにとって限られた時間での作業になる。ふつうデザイン教育の現場では、ひとつの作品を仕上げるのに半年、一年という時間をかける。その時間の中でこそ制作の醍醐味や苦労がわかるものである。ほんの数時間で何をすることができるのか。おそらく、この計画に関わるあらゆる人々にとっての不安はその点だった。

谷川真美(文化政策学部芸術文化学科)

とはいえ、綿密に計画を練るにはドイツはあまりに遠い。しかも、ゾーヴァはアンチIT派(意図してではないかもしれないが…)なのだ…。それでもできる限り打ち合わせをして、学生には自分にとっての「エコ」ということをテーマに一つ作品を作ってきてもらうことにする。それと、タイムトライアル。その場で出た課題を一定時間でこなす、という緊張感あるものもプログラムに盛り込まれた。

第一日目、緊張の一瞬が訪れる。ゾーヴァが提示したお題は「悪の華」だった。これをひとつの絵にする。これはもちろんボードレールの有名な作品のタイトルだが、ゾーヴァは学生たちの自由な発想を期待する。原作の内容に引きずられるのではなく、むしろ「あくのはな」という言葉自体から出てくるイメージを学生に求めた。逆にこれは、普段膨大な情報に埋もれ、言葉とイメージの結びつきそのものについてあまり深く考えたことのない学生たちにとってなかなか難しい作業のようである。

悪戦苦闘の末、一日目の作業が終わる。成果物を全員で見ながら、それぞれの作品をめぐるゾーヴァとのやりとりによって、自分の発想の源や固有の発想方法に初めて気づかされることも多かったようだ。

第二日目には一般や卒業生のイラストレーター、絵本画家などセミプロ集団が学生に加わり、講堂ステージの上で、本邦初の「ワークショップライブ」が始まった。ゾーヴァの提示したのはことわざ。これに、参加者それぞれが自分の発想を加え作品を仕上げていく。それぞれの発想方法、時間配分、イメージ連鎖、作業方法、皆おもしろいほどに異なっている。パリエーション豊かな成果物が仕上がった。

ゾーヴァと参加者が過ごした短い時間は、それぞれが自分の個性、その個性をもとにした発想方法と手順を自覚し、それを有効に活用しながらつぎつぎに内容を展開させていくためのすばらしい訓練だった。ゾーヴァの示した方法は思いつきのようにみえるのだが、実はなかなか奥深い。彼はそのことをきちんとわかっている、参加者に「どういところから、こういうものを描いたの?こういう表現をしたの?」と何度も問いかける。

豊かな表現の源には、きちんとした、真摯な現実世界の把握がある。それがなければ、説得力のある表現は生まれてこない。やわらかに見えるミヒャエル・ゾーヴァの仕事の深淵に、誰もがほんの少し触れることができた貴重な機会だった。

## 特別研究紹介

(平成19年度学長特別研究)

SHOPSUAC  
- 試作商品発表会までの道のり -

試作商品発表会 2009.5.15~5.31

事の発端は、そもそも私の好奇心からすべて始まった。

2006年4月、4年半暮らしたドイツから帰国したその足でSUACに着任した私は、ドイツ・デザインへの想いも冷めやらぬまま、新しい生活への順応を迫られた。先行してドイツにいた頃から、ドイツでの間違った日本の印象を払拭すべく、今的な文化の交流の場として、日本←→ドイツの相互間の情報を扱ったカルチャーサイトと  
 いうか、その一環としてショップサイトを作ってみたい  
 と思っていた。そう思いながらいざ浜松で生活していくと、  
 ハタ、と気がついた。車がないと郊外の大型店に買い物に行けない不便さ、デザイン用具の選択肢が少ないこと、銀座伊東屋(大きな赤いクリップが目印です)に足しげく通った東京生活時代を懐かしむ自分がいた。ドイツのモノを売る以前の話だ!デザインの道具は「安かろう、悪かろう」というのが常識、「弘法も筆を選ばず」と云えどもやはりある程度選べなければ。そして何よりも「選べる幸せ」が欲しいと思った。

とはいえ、本を買いたければAmazon、結婚式案内状を作るためにおしゃれな印刷用紙が欲しければ楽天、できれば安くDSのゲームソフトが欲しければヤフオク(Yahoo!オークション)と、今やなんでもネットショップで事足りてしまう。ドイツ時代から友人の買い物を請け負っていたショップサイト・ユーザーとしては、家を全く出ないで生活できる引きこもりの気持ちがなんとなくわかる。でも「私がネットショップを作る」としたらどういふものか、考えてみる。ただの



人気投票2位「音球」

ショップサイトを作っても、昨今の数多くのショップサイトの陰に隠れてしまって、潰れてしまうのは目に見えている。経営はもちろん素人だが、何よりもヘヴィユーザーとしてのキャリアを糧に、自分が欲しいサイトを作ってみようではないか。不便に感じた所に手が届く、この浜松でできること、それはやはり大学のショップサイトしかない!ちなみに母は、私が小学校の頃観ていた「キャシャーン」というヒーローアニメの最後に、いつも「キャシャーンがやらねば誰がやる?」と結ぶ語りに対して「俺がやる!」と叫んでいた。この母の言葉のあやはいつしか私のモットーとなり、今の私を支えている。そう、店がなければ自分で作るまでだ。

そんなわけで、2007年より学長特別研究の枠でデザイン学部の教員を数人巻き込み、スタートさせてはみたが、いざ始めてみると実に暗中模索という言葉がしっくりとくる。ショップサイトを作る以前にやはり商品がなければ、商品を作るにはまずデザインしなきゃ。デザインは誰が?全部一人で?いやいや、とてまかないきれません。自分とはもかくWebデザインの専門なので、あくまで

人気投票1位  
「フレキシブルUSBキーボード」

## 和田和美(デザイン学部メディア造形学科)

も指揮をとるのはサイト構築として、グッズのデザインは他の教員や学生達に呼びかけて、有志で進めてもらった。しかしそれだけでは商品カテゴリーのバランス配分に偏りが出るので、グッズで欲しいものをリストアップし、デザインする人がいないモノは当面私が担当することにした。そして今度は試作してもらう業者選定である。これが一番難航した。浜松の「やらまいかブランド」を当たったり、教員や学生の口コミを元に直接話しに行ったり、自分で探したり。浜松でまかないきれないと踏むといよいよ日本全国に範囲を広げ、数日にわたって取り憑かれたようにネットで検索したり。コラボレーションという言葉も、SHOPSUACのグッズ制作におけるキーワードであるが、これも私の前に大きく横たわるプレッシャーとなった。地元企業と学生のコラボ、地元名産のサンプリング、幸せな結婚ができれば越したことはないが、どこに当たればいいのか、皆目検討がつかなくなる時もあった。また、一から全て作り上げるのは、お金も時間もかかるので、見積もりをとって気絶するような金額になるモノ等は、すでにあるものに名入れするノベルティ関係を取り入れることにした。これは先行する他大学のショップサイトのグッズでも行われている。また、ミュージアム・ショップのように、遊び心ある面白いグッズをセレクトすることも、サイト

人気投票9位  
「テーブルウェア」  
[cedemo]

の魅力の一つとなると考えた。買わなくても、観るだけで楽しめるという、従来のウィンドウ・ショッピングと同様の機能を、ショップサイトも持っているのだから。フニャフニャのUSBキーボードやお風呂で楽しむアクアリウムは、そういう思いで取り扱った訳だが、価格が比較的安価なことから、展示会で丸いシールを貼ってポイントとする人気投票ではともに、上位に入る結果となり、思わず苦笑した。

紆余曲折を経て、なんとか展示会にこぎつけようとしていた頃、私の身体には変調が続いていた。右の親指と人差し指が常にしびれているのだが、起きている間はほとんどコンピュータを使用している私は、腱鞘炎?くらいのつもりでいたのだが、直るどころか、だんだん痛みが右腕全体に移動していくのだ。展示会を終えて約1ヶ月経った頃、とうとう首から寝違えたようにバリバリになり、ようやくマッサージを探そうと考えた(まだ病気とは考えていない)。そして体を動かすのもつらい状態になったところで、やっと水泡が現れて気がついた。まるで



水泡も「いいかげん気づけよ」と言っているかのようだった。私も人の子、無理がたたって带状疱疹で入院とあいなり、2009年が明けてからよく寝た記憶がないほど、追い立てられていた私は、ベッドで正しく寝る事ができた次第であった。

展示会のためにご尽力いただいたSUACの皆さん

# 劇場文化を伝えるための方法と課題

## 文化芸術セミナー「市民と公共劇場」

2009.5.22

永井聡子(文化政策学部芸術文化学科)

### 1.はじめに

今回の文化・芸術セミナーには、企画者ではなく講師として招かれ、約80名の来場者の中でも、一般向けに「市民と公立劇場」についてお話をさせていただいた。本稿では「大学における劇場教育」という視点を加えて劇場文化を伝えるための効果と課題を考えてみたい。両者には「個人を育み文化を育む」という共通項があると考えている。

### 2.市民と公立劇場

私は、大学院博士課程での研究後、前職の「公立劇場」でプロデューサーとして1999年から約10年勤務した。特に、その10年の間には「公立劇場(公共ホールと呼ばれた)」が各地でぞくぞくとオープンし、運営にいかにも市民を取り込むかという視点が意識され、具体化された。そして、行政、専門家、市民らが様々な取り組みを展開した。文化庁による「芸術拠点形成事業」などの助成はその一つである。

本稿では「劇場」という言葉を使用している。市民が「平等に施設を使用する」という貸館事業だけではなく、舞台機構などを有した空間がある以上、舞台制作に必要な専門性を持った人材が主体となることを込めた。劇場を運営する者の責務は「平等に様々な舞台公演に様々な形で関わるができる環境」を「生み出し」「積み重ねていく」ことである。そこに、はじめて「公共劇場=公立劇場」の本来の目的が達成されると考えている。実際、私は公演を東京から呼び寄せただけ(企画を買っただけ)の事業ではなく、「オリジナル公演」として、「文楽人形創作オペレッタ」「ダンス公演」「市民劇」等企画立案から本番までを統括してきた。「公共劇場」では、地域において「専門家」と「市民」という両者がどのような環境で、いかに協働できるかが基礎となる。「専門家」とは、「プロデューサー」であり、「企画立案」から「資金調達(調整)」「キャストティング」「スタッフ集め」「稽古から本番」そして「事後処理」までの全体を総括し、作品自体にもイメージをもって各専門分野のスタッフとともに議論をしながら「個人の感性」を整理しまとめていく人を指すと考えている。ただし、各国、テレビなどの分野によって仕事内容の相違はあるし、一つのやり方が必要とされるような職分ではない。「市民」とは、舞台鑑賞だけでなく、ボランティアの存在もある。ボランティアを導入するにあたって最も大事なことは、「市民」を「個人」として捉え「専門家」が連携し劇場運営をすることが重要だ。日本の土壌では「公立劇場」としての歴史が浅いゆえに、「プロデューサー」を「舞台作品の自主制作のみならず市民との関係づくりを含めた劇場運営を行う人材」として捉える必要があると思う。

現実問題として「生活を第一」とする市民と「劇場文化を育てることを通して地域を活性化する」という目標に向かうためには、あらかじめ専門家の世界では必須のことで、市民の中では抜け落ちる部分を想定して徹底してリスク管理をしておく必要があるからである。例えば、公

演を控えての稽古中、本番等「家庭の事情」で突如来られなくなって役割に穴があいてしまうことがあっても市民を咎めることができない。もっとも、一人一人が不誠実なことでは当然、市民間で自然淘汰されるのだが。特に市民参加の公演やプロジェクトはリアルタイムで外部評価(新聞等の批評)にさらされるため、失敗は許されない。前職の劇場で前述の「芸術拠点形成事業」(全国約3000館のうち30館のみが採択される)を受けたことは、市民の見る目を変えた。「やってよかった」「またやりたい」と市民個人の思いが見える仕組みを実現すること、数年後にその実績が目に見えてくるのが重要である。企画の段階で5年後、10年後を見据えた文化伝達の可能性が見えてくるのが望ましい。

### 3.学生と劇場教育

授業では、「専門家の領域」「市民の領域」やその接点を「考える」ことなど、「専門性」に必要な最初の段階を授業の中で理解させることが一番の目的である。劇場人になる者もいれば、いい観客として育つ者もいるだろう。わたしは本学で3年の非常勤を経て、一昨年、専任に着任した。非常勤時代には劇場実習を授業に織り込み経験したことを踏まえて、『パフォーミングアーツ基礎演習』で、「企画を実践する」という授業を行い、来年は3回目を迎える。学生の場合、市民とは違う。結果に未熟さが見えようとも「本物のものづくりの意義」を理解し、「反省できる」ことが第一であると考えている。極論すれば、失敗してもかまわない。

劇場は舞台という時間芸術である以上、「知識」の修得、「理論」の構築だけでは足りない。実際、学生が授業を通して現場に関わる前と後では格段の意識の違いが見てとれる。しかし、学生が「自由に」=「好きなように」やることは「劇場教育」をしていることにはならない。そこには「演劇制作におけるプロの領域への一歩」に必要なマナーもなければルールも存在していないからである。また学生が問題点を意識し、反省することなく公演として成功したとしても、来場したお客様に大絶賛されたとしても、それまでの授業の積み重ねがなければ意味がない。

### 4.劇場文化を伝えること

「専門家」と「市民」の両者の問題意識の共有とそれに基づく活動の蓄積があってはじめて劇場文化となる。劇場運営の専門家が舞台制作を行いながら、市民と協働の土壌づくりをいかに行うか、その全体像をイメージし実現するのが「プロデューサー」の役割である。

この10年は、地域にできた新しい劇場のプロデューサーたちが一時代を創り、駆け抜け、また違う劇場に移った区切りの時代でもある。しかし、全国各地の公共劇場に「どのように専門家を配置するか」という基本的なことが、いまだに課題であるのは残念なことだ。

## 調査研究報告

# 誰もが容易に安全に移動できる都市をめざして 浜松型次世代交通システムの提案

河岡徳彦(デザイン学部生産造形学科)

1989年、フランス東部アルザスにある町ストラスブールでは21世紀に向けた都市交通のあり方として、人・自転車・自動車との調和をはかるため、公共交通を軸とした都市活性化の具体的手段にLRTを選択した。同じころ浜松市を含め日本の多くの都市では自動車を軸とした街が生まれ発展したが、現在では都市中心部の魅力が失われ産業・人口・少子高齢化など様々な課題をかかえ今日に至っている。

上記のストラスブールはその後フランス本国をふくめ世界の都市交通における人、自転車、自動車との調和のありかたの成功例としておおくの観光客や住民を都市中心部に集め注目されている。

何故?成功したのか、街の名前が示す(街道の居城)ように市民中心に交通に関する問題意識の高さなど、町づくりの伝統や歴史などが成功の要因といわれている。浜松型次世代交通システムの提案は早くから市民参加で立ち上げ、交通ネットワークをはじめ課題項目ごとに1部会から4部会に分かれて、それぞれのあるべき解決案を市民・大学参加で審議作成中である。ここではデザインで街が救えるか?、都市景観を変えたLRTのデザインの素晴らしさが街のシンボルになりうる公共交通機関デザインに視点を定め、語ってみたい。

## 「自動車の持つ利便性を生かし、人、自転車、自動車の調和をはかる」

誰もが交通弱者になる。世代人口構成比からみて現実はずそこまで迫っている。シニアマークに示されるように車の運転が限定される世代が増大する。しかしながら生活における移動の利便性は世代を問わず不可欠である。自動車デザインは利便性の具体化や車両パッケージのありかた、人の座らせ方、運転の易しさ、安全性の追求、快適性、素材加工、コストなどなど世代別に詳細なデータを元にデザインされている。この強みを生かして次世代LRTデザインに反映させれば、自動車からLRTに乗ってみようという気持ちを起させると思う。

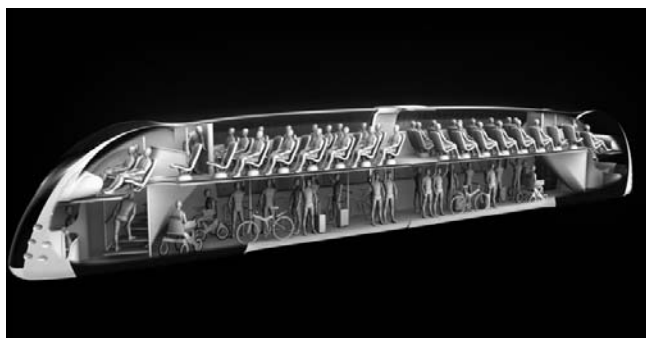
自動車の魅力は何といってもドア・トゥードア・の利便性だろう。個人の移動具としての最大のメリットでありつづけるのは正にこの点にある。

提案のLRTデザインコンセプトは「自動車の持つ利便性を生かし、人、自転車、自動車の調和をはかる」が主題テーマである。

## 「市民の移動シーンを描いて2階建てLRT提案」

利便性を具体化するために、各世代や交通弱者の具体的な使用シーンを描き、快適と思えるシーンを仮検証してみる。

現状の乗り物を追うと子供用バギー、車いす、電動車いす、自転車、バイク、タクシー、ミニバス、路線バス、電車、船、飛行機になる。移動の選択肢は広いが、現実には日常生活における移動は自動車が中心で選択肢がせますぎる。



先のストラスブールでは自転車、自動車からのパーク・アンド・ライドの乗り継ぎが、それぞれの機動力の良さを発揮できて活性化されている。

平野部が広い浜松市の成り立ち、郊外に点在する商店街モール、群のように点在する町、これらを結ぶには3キロメートル圏内は自転車の走行に適している。

既存の電車や路線バスがあるが自動車に比べれば快適性、時間制約など利便性に劣る。そのような背景から自転車、バギー、車いすなどと同居できるマルチスペースを持ったLRT2階建て案が討議のなかで生まれた。2階建ては鉄道の幹線では存在するがLRTでは未だマルチスペースを備えたモノはない。

2階建てにより1階を交通弱者や自転車の専用スペースに充て、2階は着座を前提とすることで移動のストレスを減少できる。

## 暮らしやすい生活の「わ」を目指す

浜松型提案システムの一例は先に「あるべきイメージ」を描き、そこから検証して真の利便性とは何かを提示する。これは様々な意見がある中、誰もが望む快適・利便性を提示し、自動車と調和できる提案が不可欠であると思う。平行して浜松市独自の都市交通のありかたを論じながら実現性への検証を進めている。20年後、浜松の交通改革は良かったといわれることを期待したいと念じている。



## ギャラリー 学生自主企画「SUAC×落語」開催

2009.6.30

本学初の落語会「SUAC×落語」が6月30日、ギャラリーにて開催されました。この落語会は芸術文化学科の「パフォーミングアーツ基礎演習」を履修する学生を中心に組織された実行委員会が、地元浜松で定期的に落語会を開催する「浜松寄席の会」の協力を得て実現したものです。

落語会ではプレートーク（「落語—この味なもの、異なるもの—の素性について」担当：須田悦生特任教授）と本学学生の和太鼓同好会「打夢打夢」による演奏に続いて桂平治師匠が登場、途中休憩を挟みながら「転失気」「酢豆腐」「鈴ヶ森」の3席が披露されました。

落語はわが国の伝統的な話芸ですが、実行委員会に関わった学生によれば、現代の若者にとってはあまり馴染みのない「古典芸能」という印象があり、学内の落語会に有料（一般1800円、学生前売600円）でお客様を集めることができるのかどうか、特に学生の来場者がどの程度になるかについて不安があったとのことでした。しかしながら積極的な販売活動が功を奏し、わずかに残った当日券を含めてチケットは完売、約140人の来場者の内、学生が6割程度と当初の想定以上に学生が集まったことには大きな手ごたえを感じたようでした。また当日は本学着物倶楽部主催の学内企画「浴衣の日」ともタイアップし、浴衣着用の学生のチケット価格優遇を設けたところ多くの学生が浴衣姿で来場し、地元浜松の伝統的な地場産品である浴衣についての認識を新たにするとともに、寄席らしい粋な雰囲気作りにも貢献することとなりました。

今回会場となったギャラリーは普段、学生や教員の企画展等が開催される場所ですが、講堂や大教室に比べて手狭なこの場に椅子を並べ、高座を設けて即席の「寄席」会場を設置したことで、桂平治師匠の見事な話芸を近距離で味わうことが可能となり、臨場感にあふれた雰囲気は落語会を大いに盛り上げたものと思われます。

実行委員会に関わった学生たちは会の企画、出演者との折衝、企業等への協賛金依頼、関係部署との打合せ、チケットの販売、プログラムの製作、会場の設営、当日の進行などすべてを自分たちで手掛け、日頃学ぶアーツマネジメントを実践の場として体験することとなりました。また当日来場した学生たちにとっては普段テレビで接する「お笑い」などとは一味違う、味わい深い言葉の芸術の世界に触れることができた貴重な機会になったことでしょう。



## 「夏季 手づくり公開工房」開催

2008.8.22~23 自由創造工房 他

恒例の「夏季 手づくり公開工房」が今年も8月22、23の2日間 にわたり開催されました。この講座は高校生以上の一般市民を対象に、「自由創造工房」ほか学内の施設や器具を使って、「手づくり」の作品製作を、1~2日の実習を通して学んで頂くものです。



今回は、「木製ツールを作る」(講師:デザイン学部生産造形学科 田邊英隆)、「木炭で石膏像をデッサンする」(講師:デザイン学部空間造形学科 鳥居厚夫)、「光具 光るコレクション額」(講師:デザイン学部メディア造形学科 佐藤聖徳)、「テキスタイル<手織り>」(外部講師:種村興治、桑原壽子)の4つの講座が設けられ、受講生は県外からの参加者を含む定員一杯の約50名に上りました。

各講座では、まず担当の講師が



### 文化・芸術研究センター

ら、材料や製作物、製作工程、作業の安全などに関する基礎的な説明を受けた後、それぞれの作品製作に取り掛かりました。各講座とも1~2日の作業で完成するように予め材料などがアレンジされているのですが、創作の過程では、日頃慣れない工具の使用や細部の調整に苦労しながら、受講者各人、自分なりの作品作りに挑戦し、創造的な夏の1日を楽しく過ごされた様子でした。

文化・芸術研究センターでは「開かれた大学」を実践するため地域との交流を図り、多くの市民の皆さんに学びと創造の場を提供することができるよう、今後も公開講座、公開工房の一層の充実に工夫を重ねていきたいと考えています。



第24回国民文化祭・しずおか2009 THEオペラ  
三浦環 生誕125周年記念 第3回県民オペラ

プッチーニ作曲『蝶々夫人』(全2幕)

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

静岡県ゆかりのプリマドンナ・三浦環が世界各地で生涯2,000回以上演じたといわれる『蝶々夫人』を、三浦環の生誕125周年を迎える今年、国民文化祭のシンボルイベント「THEオペラ」として、また本県在住・出身者が参加する「第3回県民オペラ」として、10月25日(日)にアクトシティ浜松大ホールで上演します。

三浦環を顕彰して創設された「静岡国際オペラコンクール」の第1回最高位及び三浦環特別賞受賞の大岩千穂さんをタイトルロールに迎え、他には浜松市出身の水船桂太郎さん、永田直美さん、牧野正人さんといった日本のオペラ界を代表する歌手を配しました。その他のソリスト、合唱などにはオーディションで選ばれた本県在住や出身の皆さんが多数出演します。



制作発表記者会見(県庁)

本学会場に、今年1月と7月には出演者のオーディションが、また6月からは音楽稽古が始められ、更に9月からは立ち稽古に入るなど、段階を追って準備が進み、出演者・スタッフが一体となって公演の成功に向けて頑張っています。

19世紀末の長崎を舞台にし、日本女性の悲劇を描いたオペラ『蝶々夫人』。100人を超える出演者の渾身の舞台に是非ご期待下さい。



チケット案内(発売中) チケット価格(税込み)

S席(指定)	完売 6,000円
A席(指定)	4,000円
一般自由席	2,000円
学生自由席(大学生以下)	1,000円

全国チケット  
びあ等で  
発売中

インフォメーション

メディアアートフェスティバル2009(SUAC文化芸術セミナー)  
文化庁メディア芸術祭 浜松展

<http://1106.suac.net/MAF2009/>

開催日:2009年10月30日(金)~11月3日(火/祝) 会場:静岡文化芸術大学

文化庁メディア芸術祭 浜松展 シンポジウム  
「音楽がアニメーションをどう変えるか Animation Metamorphoses」

日 時:2009年11月3日(火/祝) 14:00~16:00  
会 場:講堂(SUAC関係者は同時中継の176/276大講義室にも入場可能[各200名])  
出演者:菅野よう子 作曲家/編曲家/プロデューサー  
神山健治 『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』監督  
渡辺信一郎 『カウボーイイビバップ』『Genius Party』『BABY BLUE』監督  
司 会:佐藤大 脚本家

文化庁メディア芸術祭 浜松展「TENORI-ON」ワークショップ

日 時:2009年11月1日(日) 14:00~17:00(予定) 会場:ギャラリー  
協 力:ヤマハ株式会社

※上記の2つのイベントのみ、事前申込/抽選で選ばれた方だけが入場できます。申込先は以下です。

<http://plaza.bunka.go.jp/hamamatsu/events/>

その他

- ・第12回文化庁メディア芸術祭 短編映像作品集上映
- ・文化庁メディア芸術祭 浜松展 「otoセレクション」
- ・MAF2009 シンポジウム「国立メディア芸術総合センター(仮称)を考える」(仮題)
- ・MAF2009 「フィジカル・コンピューティング」ワークショップ
- ・MAF2009 メディア・パフォーマンス
- ・MAF2009 ムービー・シアター
- ・MAF2009 インスタレーション・ギャラリー
- ・MAF2009 Flash/Web ギャラリー
- ・特別招待展示作品展示
- ・MAF2009 SUAC CGギャラリー など

事務局・連絡先 デザイン学部メディア造形学科長嶋研究室

シンポジウム  
「国際交流と文化」

日時:10月25日(日)  
13:30~16:30

会場:静岡文化芸術大学講堂  
コーディネーター:佐野真由子  
(文化政策学部芸術文化学科)

第1部

パフォーマンス&レクチャー  
「吹奏楽はどこから来たの?」

出演:SUAC Wind Ensemble  
(静岡文化芸術大学)  
講師:平野昭(静岡文化芸術大学教授)

「祭のラップと国際交流」

出演:野口町町内会(浜松市)  
講師:奥中康人  
(大阪大学大学院文学研究科招聘研究員)

第2部

基調講演  
「洋楽の導入からみた日本の近代化と国際交流」

講師:細川周平  
(国際日本文化研究センター教授)

パネルディスカッション

司会:富沢寿勇(静岡県立大学教授)  
パネリスト:細川周平、平野昭、奥中康人

申込先 国民文化祭静岡県実行委員会事務局  
TEL:054-221-3222

## ○前期公開講座「文化とデザインの時代」

9月5日(土) 「日本の司法文化と裁判員制度の問題点」	藤田 憲一(文化政策学科)
9月12日(土) 「文化消費社会のデザイン」	伊坂 正人(生産造形学科)
9月26日(土) 「美術館における中期経営計画について」～滋賀県立近代美術館の場合～	尾野 正晴(芸術文化学科)
10月10日(土) 「何がいい演奏を生むのか」～オーケストラ・マネジメントの世界～	中尾 知彦(芸術文化学科)
10月17日(土) 「モダンデザインの誕生」	花澤 信太郎(空間造形学科)
10月24日(土) 「アナタノサイト、イケテル?昨今のWebシステム全解剖」	和田 和美(メディア造形学科)

受講料:1,000円/回 通し受講の場合4,200円 高校生・本学の学生は無料

## ○後期公開講座「多文化社会で生きるII」

11月14日(土) 「国民国家からみた多文化社会」	馬場 孝(国際文化学科)
11月21日(土) 「外国人研修生・技術実習生と日本社会」～問われる受け入れ体制～	馬 成三(国際文化学科)
12月5日(土) 「多文化共生のための教育」～浜松市砂丘小学校の事例から～	勝浦 範子(国際文化学科)
12月12日(土) 「日本人がアメリカの多文化社会に生きるということ」～ペインブリッジ日系人コミュニティの歴史から考える～	鈴木 元子(国際文化学科)
12月19日(土) 「フランスと多文化社会」～地中海都市マルセイユから考えること～	石川 清子(国際文化学科)
12月26日(土) 「多文化社会におけるベトナム系住民」	岡田 建志(国際文化学科)

受講料:1,000円/回 通し受講の場合4,200円 高校生・本学の学生は無料

## ○特別公開講座「新能」

10月6日(火) 第一夜 能講座「恋の精神論」	19:00開演
10月7日(水) 第二夜 能講座「恋の身体論」	19:00開演
10月8日(木) 第三夜 狂言「茶壺」能「恋重荷」	18:00開演

受講料:3,000円(高校生 無料)

## ○室内楽演奏会

10月23日(金)	東京藝術大学学生による室内楽演奏会 場 所:本学ギャラリー 18:15開演 入場料:一般1,500円 学生600円
11月23日(月・祝日)	相曾賢一朗ヴァイオリン・リサイタル2009 浜松公演 場 所:本学講堂 14:00開演 入場料:一般3,000円 学生2,000円
12月14日(月)	ウィーン古典派 フォルテピアノと木管アンサンブルの饗宴 (名古屋公演) 場 所:宗次ホール 18:45開演 入場料:一般3,000円 学生1,800円
12月15日(火)	ウィーン古典派 フォルテピアノと木管アンサンブルの饗宴 (浜松公演) 場 所:本学文化・芸術研究センターホール 18:15開演 入場料:一般2,000円 学生800円

## ○しずおかユニバーサルデザインの絆in浜松 「次の世代に今できること」

12月4日(金)	記念講演(樋口恵子)、パネルトーク、UD研究発表会、特別講演(イーレン・オストレフ)、展示・市民参加イベント(5日まで)
12月5日(土)	UDコンサート 場 所:本学

## ○「静岡とジャポニズム」展

世界に認められた静岡の美一富士とジャポニズム	
10月7日(水)～10月18日(日)	場 所:本学ギャラリー
	入場無料

### 編集後記

10月24日から本県で開催される第24回国民文化祭では、県内各地で「文化」に関わる様々な催しが予定されています。ここ静岡文化芸術大学でも「文化庁メディア芸術祭浜松展」が本学メディアアートフェスティバルの併催イベントとして行われますが、本号巻頭ではメディア造形学科の長嶋教授にメディアアートを取り巻く現状と将来の可能性などについて寄稿頂きました。オペラ蝶々夫人の他、インフォメーションでもご紹介した新能や室内楽演奏会など、秋はまさに「アートの季節」です。派手さはなくともアカデミズムに彩られた本学発信の「文化と芸術」が多くの人の豊かな心に届きます様。(St.)

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター  
ニュースレター

Vol.10  
September 2009

発行人:上野征洋 編集人:富田晋司  
発行:静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)



古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています。